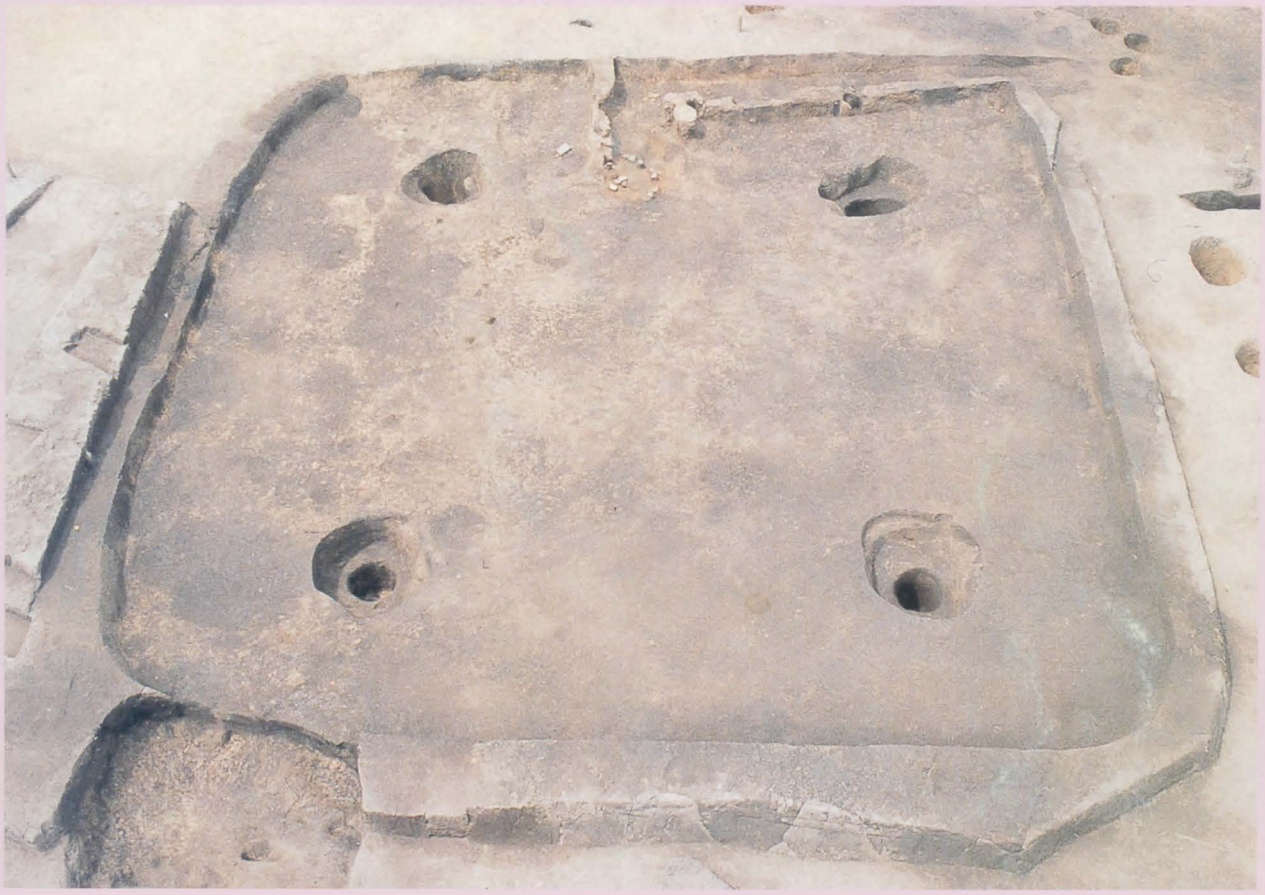
額見町遺跡

（額見町遺跡C・D地区）

串・額見地区土地区画整理事業関連
埋蔵文化財発掘調査概要報告書-3-



2000.3
石川県小松市教育委員会

目　　次

Ⅰ．はじめに …… 1

Ⅱ．A地区・B地区の調査でわかったこと …… 2

1．A地区・B地区の調査と地形 …… 2

2．調査成果の概要 …… 2

Ⅲ．今回の調査内容と主な発見 …… 4

1．額見町遺跡C・D地区の全体像と村落景観 …… 4

2．竪穴住居の構造とその変遷 …… 6

3．建ち並ぶ掘立柱建物 …… 10

4．古代の墓穴 …… 11

5．製鉄鍛冶と鍛冶道具 …… 12

6．その他の主な遺構と遺物 …… 14

Ⅳ．額見町遺跡を多くの人に知ってもらうために …… 16

Ⅴ．さいごに …… 17

額見町遺跡調査区域全景（平成11年3月撮影）

Ⅰ．はじめに

額見町遺跡は、石川県小松市の南西部に所在する遺跡であります。飛鳥時代から平安時代まで営まれた古代集落遺跡で、渡来系カマドと言われるオンドル状遺構をもつ竪穴住居跡を検出したことで注目を集めました。遺跡規模は約250,000㎡と言われており、柴山潟を北西に望む小高い台地上に立地します。広大な台地であるために、早くから田畑などの開墾がなされたり、山砂の採取など、破壊の手がところどころに及んでいる区域でありました。これは当地が小高い台地の突端に位置するなどの理由から、遺跡発見が大幅に遅れてしまったことに主な要因がありまして、大規模な開発計画がこれまでなかったこともかかる事態を招いたと言えます。

額見町遺跡の位置（縮尺1/150,000）

このように、額見町遺跡の発掘調査は、当地に本格的な遺跡調査が行われた初めてのものでして、遺跡の北東側約38,000㎡を工業団地造成することを受けて始まりました。工業団地造成は台地を削り取り、平地にする工事であるため、工事区域内にある遺跡は全て消滅してしまいます。そのために、工事前に発掘調査を行い、全て記録に残し、出土品を採集する必要があるのです。発掘調査は、まず、平成７年の春に遺跡の内容や規模を確認することから始めました。このような調査を試掘調査と言いますが、この調査成果をもとに調査面積や調査期間、調査費用を設定し、同年９月から本格的な発掘調査に着手しました。平成８年10月までにＡ地区（5,500㎡）を完了し、平成８年10月から平成10年10月までにＢ地区（7,700㎡）を完了しました。そして、工業団地内を通る県道南加賀道路粟津ルート建設工事に伴い、その敷地代替地として石川県立埋蔵文化財センターが南端の2,800㎡を平成９年度に調査完了しています。今回報告するＣ地区とＤ地区は、Ａ・Ｂ地区の南西側にあたり、Ｃ地区が6,500㎡、Ｄ地区が3,500㎡の調査面積をもちます。Ｃ地区が平成10年４月６日から同年12月20日にかけて、Ｄ地区が平成10年６月15日から同年12月20日にかけて発掘調査を行いました。以上の発掘調査で、調査全体面積の2／3にあたる約25,000㎡が完了しており、終わった区域から既に工事が着手されています。

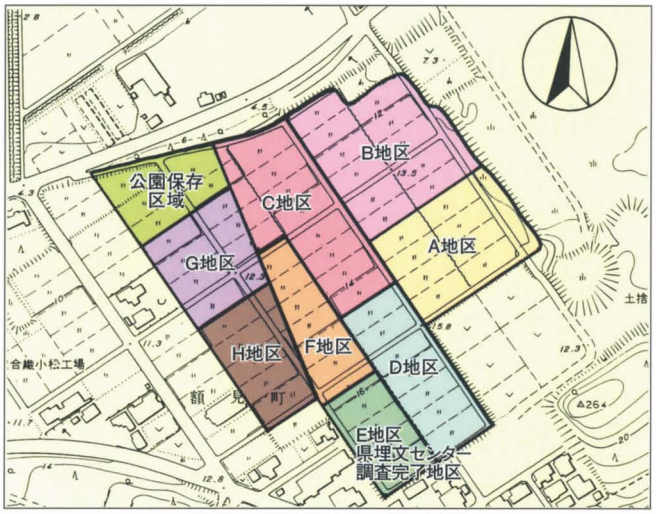
竪穴住居跡の遺構図測量風景

額見町遺跡北東区域遠景（南西より）

II．A地区･B地区の調査でわかったこと

1．A地区･B地区の調査と地形

調査区域の設定は、本来は地形などで区切るべきものですが、複雑な地形であるのと調査手順の都合から、1年で完了できる面積を農道などによって区切って任意に設定しました。そのため、地区をまたがって存在する遺構などが多くあり、地区に関係なく遺跡は連続して分布しています。地区名称は、調査区域の北東隅から順次着手するごとに付けているため、調査着手当初とは地区名称に若干の変更があり、今では右図のようになっています。



額見町遺跡調査区域区割図

A地区とB地区は、調査区域の北東側に位置し、東をA、西をBとしています。A・Bの中間地点は、地形が盛り上がる部分で、ちょうど削平を受けている部分がそこにあたります。A地区はそこから東へ強く傾斜し、深いすり鉢状の谷部を形成するのに対し、B地区は南北に沿って浅いくぼみをもつ程度で、西側に向かって馬の背状に再び盛り上がってから台地縁辺部へと傾斜して行きます。このように一見平坦に見える台地部分も小さな谷や隆起部分が入り組み、複雑な地形を呈しています。住居跡などの遺構もこのような複雑な地形の制約を受けて営まれており、北に面する急傾斜地や台地頂上部などを避けて、地形が安定する浅い窪地や緩い傾斜地に集中します。潟に面する小高い台地では、北からの強い風が吹き込むため、それを避けて生活用の建物は建てられたのでしょう。これとは反対に、土器を焼く穴（土師器焼成坑）や製鉄鍛冶炉などの手工業生産に関連する施設は傾斜地に集中する傾向があります。これは北から吹き込む強い風を利用する意図でここに作られたものであり、地形や自然環境に合わせ、それに適したものを村の中で配置していたと理解されます。

2．調査成果の概要

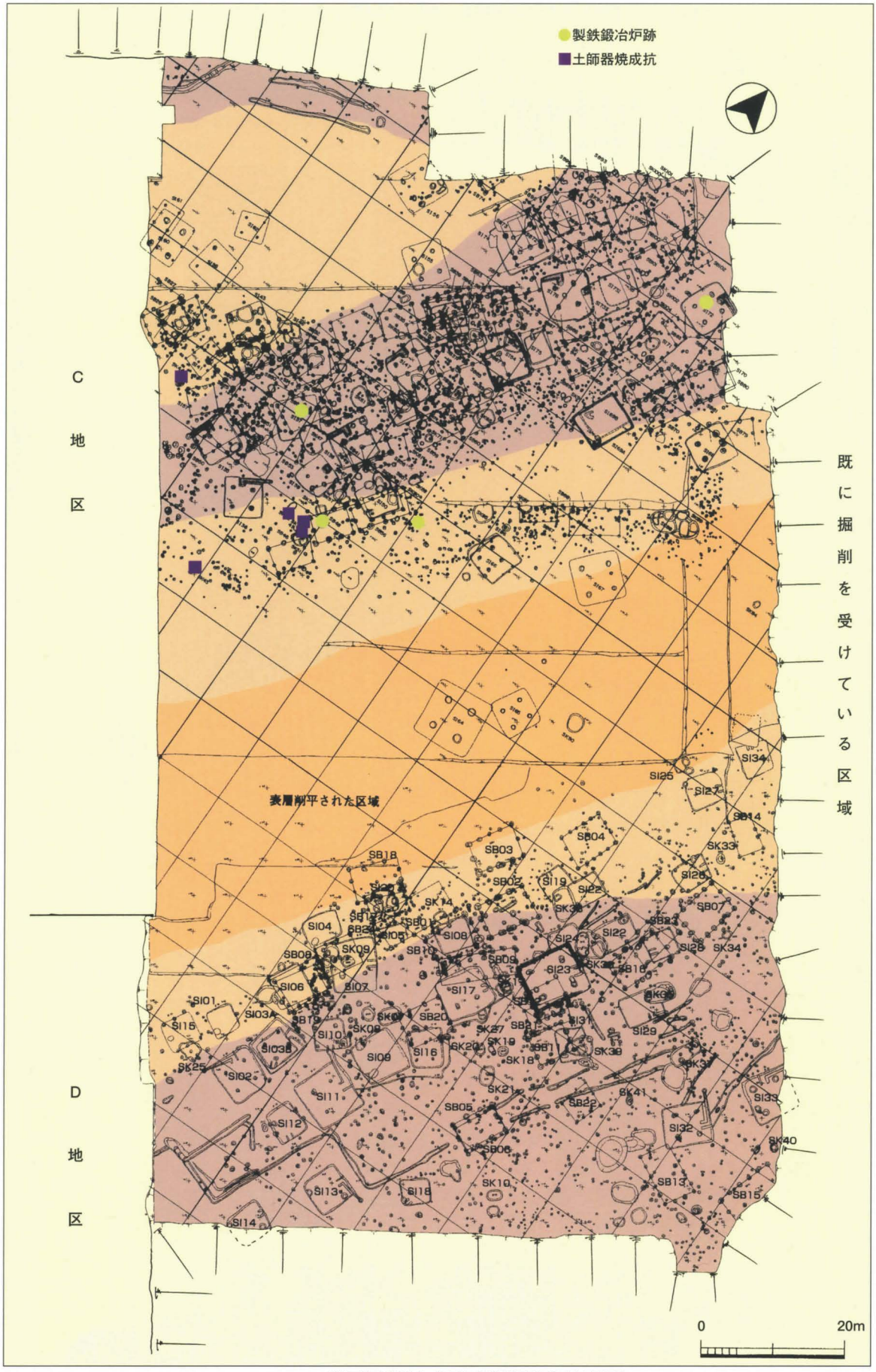
A地区・B地区の調査概要については、平成９・10年度に刊行した２冊の概要報告書を参照していただければ、わかりますが、ここでその要点のみをまとめておきたいと思います。

額見町遺跡は、「はじめに」でも述べたように、渡来系カマドと言われるオンドル状遺構を設置した竪穴住居跡を発見したことで脚光を浴びた遺跡でして、A・B地区あわせて13軒発見されています。今回の調査でもさらに軒数は増えており、渡来人が集団移住した古代村落であることはほぼ間違いないと言えます。渡来人たちはB地区で発見された土師器焼成坑や製鉄鍛冶炉跡から推察して、土器作り、鉄作りの技術者として移住してきた可能性が高く、７世紀後半には、朝鮮系の技法を用いた煮炊き用の土師器が作られます。

このように、額見町遺跡は渡来人の村としての顔をもつ一方、古代越前国江沼郡額田郷関連村落としての位置付けも可能です。A地区で北に方位軸を合わせながら整然と建物が並ぶ様子は律令政治のもと計画的に配置された村落の様相を色濃く示しており、B地区でまとまって確認された米蔵跡と思われる総柱建物跡もそれを伺わせます。また、役人の存在を予測させる多数の陶硯や政治に関連するような儀礼用具の出土は、行政組織に包括された村の様子を垣間見せています。ただ、残念なことに地方行政を司るような施設跡は、これまでの調査では検出できておらず、A・B地区に関しては専ら居住区であるとともに手工業生産区であったと予想されます。

オンドル状遺構をもつ竪穴住居跡（SI36）

渡来人が作ったと思われる朝鮮系軟質土器



額見町遺跡A・B地区遺構配置図(1/800)

Ⅲ. 今回の調査内容と主な発見

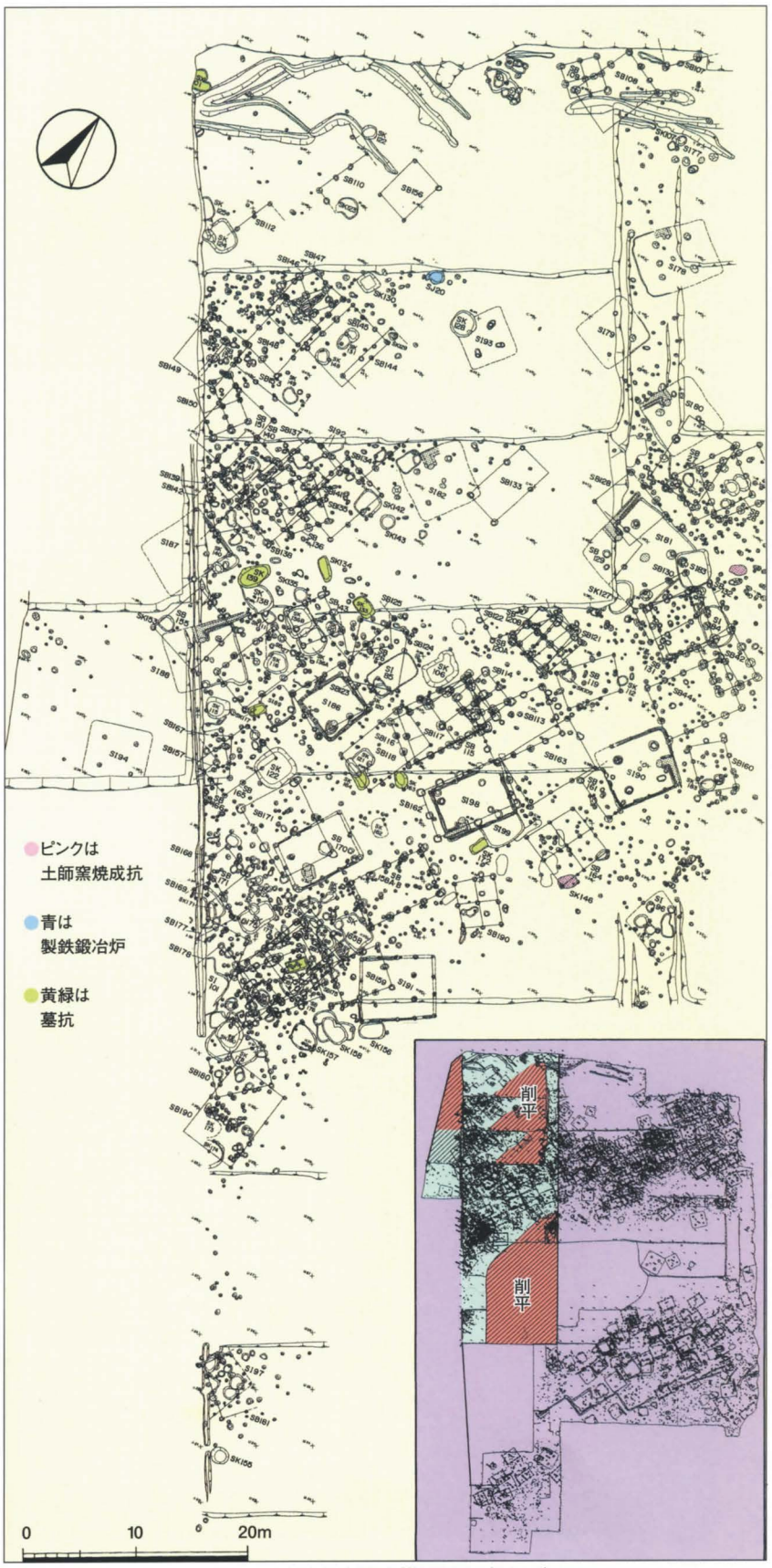
1. 額見町遺跡C地区･D地区の全体像と村落景観

今回の調査区域でも、A・B地区同様、飛鳥時代から平安時代にかけての古代集落遺跡が連続して確認されており、これまでの調査内容を大きく塗り替えるものではありませんが、これまで発見されなかった墓穴と思われる長方形土坑がまとまって確認できたことが今回の調査の特徴と言えます。さらに、製鉄に使う木炭を製造した穴や石を使った製鉄鍛冶炉の確認なども注目されるものです。また、オンドル状遺構を伴う竪穴住居跡や土師器を焼いた穴（土師器焼成坑）は今回の調査区でも確認されており、当遺跡でのオンドル状遺構は20軒を数えるまでになりました。カマドが削平されてオンドル状を呈するか否か不明の竪穴住居跡がかなりの数を占めるため、実数としてはこの倍以上の軒数は存在していたものと予想されます。

C地区の概要

C地区は棚田状に田圃造成した時に著しく削平を受けており、調査区の35%程度が消失しています。台地の頂上部を除いては、削平を受けた部分にも周辺同様に遺構分布するものと予想でき、それから推察するに、B地区の集落分布がそのままC地区へと繋がって存在していることが理解できます。ただ、C地区でも南西側になると、竪穴住居跡は減少傾向にあり、9世紀以降の遺構が目立つなど、時期の新しい建物が目立つ傾向にあります。時期によって棲み分けしていたとは言えませんが、中心となる区域

額見町遺跡C地区南東半区域全景

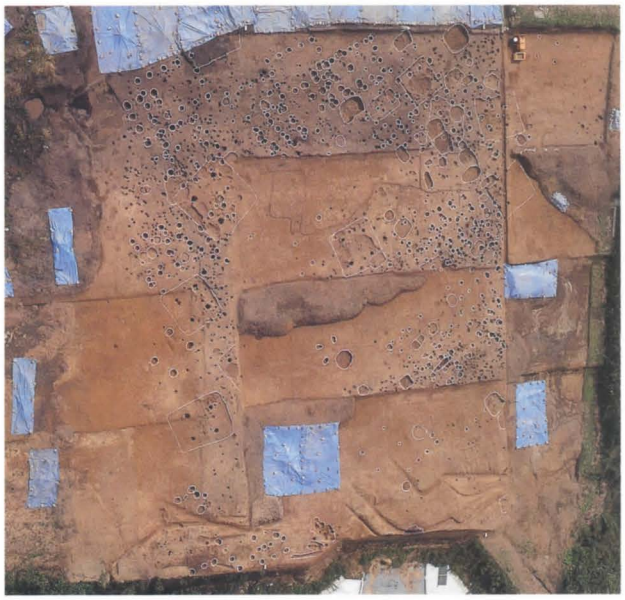


額見町遺跡C地区遺構配置図(1/600)

が異なっていた可能性は高いようです。C地区で検出された主な遺構は、竪穴住居跡24軒、掘立柱建物跡74棟、墓坑７基、土師器焼成坑１基、製鉄鍛冶炉跡１基、製炭土坑２基を数え、出土品には陶硯・土馬・陶製分銅などの特殊品、鍛冶道具、銅鈴・管玉などの装身具も出土しています。

D地区の概要

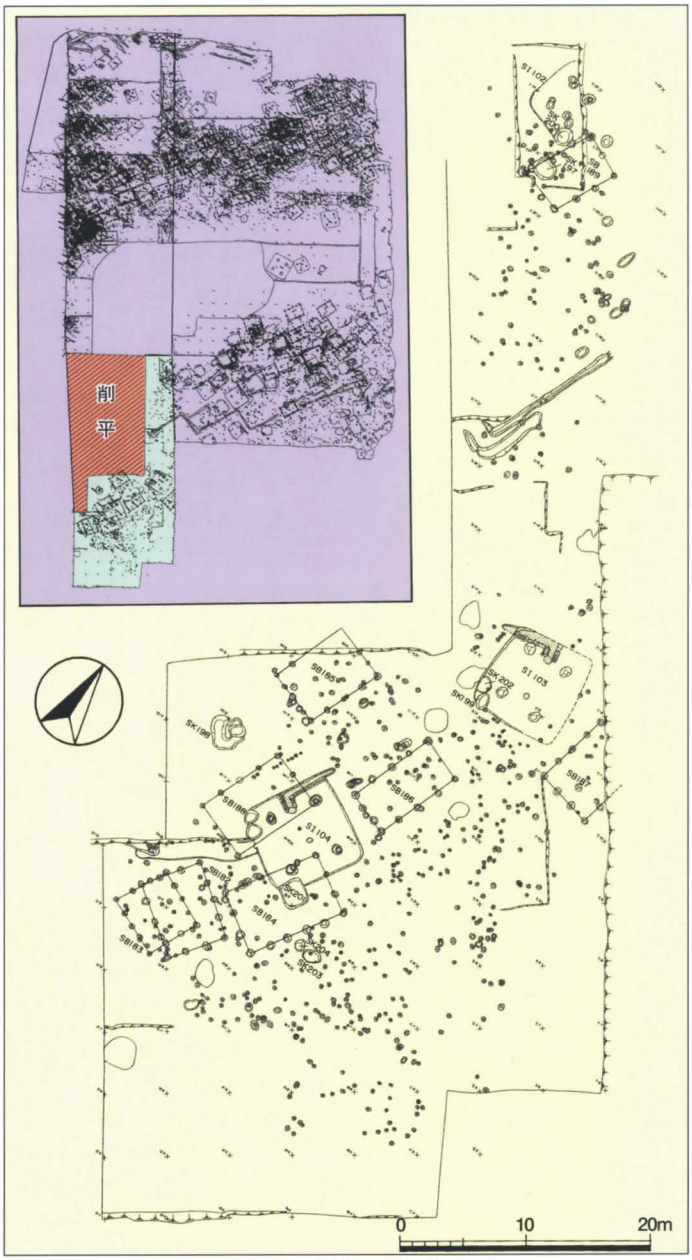
D地区は初年度に調査を行ったA地区の南側に位置する区域で、A地区に見られた深い谷がそのままD地区に継続しています。谷部は深く、A地区でもそうだったように、谷部に沿うようにして緩傾斜地に遺構が分布します。ただ、遺構数は少なく、建物は３軒の竪穴住居跡と８棟の掘立柱建物跡を検出しただけで、南側へと標高が高くなるにつれて無遺構地帯となります。竪穴住居はいずれも７世紀前半のオンドル状遺構の付くものであり、A地区から続く集落の末端に位置するものと評価できます。掘立柱建物跡の形態も７世紀代に位置付けられる可能性が高く、村落成立期の建物のみが分布する区域と言えます。なお、D地区の西側は棚田状の削平によって遺構は消失していますが、一部残存する箇所や南西側隣接区域の様相から考えて、A・B区の台地頂上部の遺構の薄い状態がここへ続いているものと考えられ、頂上部を境に集落は分割されていたものと予想されます。



額見町遺跡C地区北西半区域全景

額見町遺跡D地区の建物遺構が並んだ状態

額見町遺跡D地区全景



額見町遺跡D地区遺構配置図(1/600)

2. 竪穴住居の構造とその変遷

a. 縄文時代から古代までの竪穴住居構造

古代の竪穴住居の構造については、概要報告書の１・２の中で、詳しく述べているため、ここではおおまかな構造と縄文時代からの竪穴住居の変化を簡単に述べてみたいと思います。

竪穴住居とは地表面よりも一段掘り下げた竪穴の底面を床にし、穴の壁をそのまま家の壁に使う住居構造です。竪穴は深いもので、１ｍ近く掘るものもあり、入り口は階段を付けて出入りしていたようです。屋根は主柱で支えますが、屋根の軒先は直接地面に接しており、屋根の上に粘土を貼って保温効果を高める工夫もしていました。このような屋根の構造を伏屋根と言いまして、外見は低い屋根のかかった「あなぐら」のような家の構造をもちます。加賀地域では縄文時代から奈良時代までの間、普遍的に見られる住居形態ですが、東北や関東などでは平安時代や中世まで一般の住居として作られ続けていました。冬の寒さが厳しい地域では平地に建てる掘立柱建物よりも保温効果に優れた竪穴住居を選んだのでしょうか。

復元された伏屋根構造の竪穴住居（富山市北代縄文館）

古代の竪穴住居も基本的な構造は縄文時代からさほど変化はありませんが、柱の配置や本数、竪穴の形、火処（火を使う場所）の位置など時代によって異なっており、それに伴って住居内の生活空間が多少変化したようです。縄文時代の火処は、石や粘土で囲んだだけの炉で、竪穴のほぼ中央にあるものが多く、囲炉裏的な使われ方をしていたようです。弥生時代や古墳時代になると炉は片側に寄って行きますが、主柱で囲まれた中央の空間から外に出ることはなく、縄文時代からほとんど変化ありません。ところが、古墳時代後半頃、煮炊き専用施設として朝鮮半島からカマドが導入されると、日本各地で竪穴住居の壁際にカマドが造り付けられるようになり、加賀地域では飛鳥時代に普及します。カマドの出現により、炊事場の位置や物置き場など、竪穴内の空間がカマドを軸としたものに変化します。カマドは粘土でトンネル状に作られた施設で、燃焼効率を高めるため煙突で排煙する構造をもっています。通常のカマドは煙突が家の外へと直接伸びる戸外直結型なのに対し、額見町遺跡で発見されたカマドの多くは、煙突が「L」字に曲がって竪穴の壁伝いに巡るもので、オンドル状遺構と言われています。オンドル状遺構は煙突が家の中を巡るため、その輻射熱による暖房機能を合わせもっていたと考えられており、朝鮮半島では紀元前から竪穴住居に採用されています。日本では定着しないカマドで、国内で伝わったものではなく、朝鮮半島から直接渡った移民の竪穴住居に採用されたものと考えられます。温暖な気候の日本では暖房機能をもったカマドは必要なかったために周辺地域へ広まることがなかったのでしょう。

縄文時代中期の竪穴住居跡（念仏林遺跡）

弥生時代後期の竪穴住居跡（念仏林南遺跡）

飛鳥時代前半の竪穴住居跡と戸外直結型カマド（念仏林南遺跡）

古墳時代中期の竪穴住居跡（念仏林南遺跡）

b. C・D地区の竪穴住居跡とオンドル状遺構

C・D地区からは27軒の竪穴住居跡が発見されましたが、その半数以上は上部を削平されたものや片側半分が削り取られたもので、ほぼ完全な形で調査できたものは５軒程度です。そのため、今回の調査で得られた知見は少なく、注目される点のみ重点的に示したいと思います。

四本主柱をもつ竪穴住居跡

竪穴の中に四本の主柱が均等配置される構造の中規模クラス以上の竪穴住居跡は、今回の調査でも戸外直結型カマドをもつと断定できるものはなく、いずれもオンドル状遺構が伴います。時代は飛鳥時代に限られ、飛鳥時代後葉に位置付けられるSI90では、竪穴の壁

SI90のオンドル状遺構手前右にあるピット
（ピット内にはカマド部材や焼土が捨てられている）

オンドル状遺構を伴う中型規模の竪穴住居跡（飛鳥時代3/4期、SI90）
（竪穴壁沿いに溝が巡り、溝内に小さな穴が開く）

SI90のオンドル状遺構（カマドは大半が破壊されている）

沿いに溝が巡るのを確認しました。このような溝は竪穴の土壁を保護する板塀である可能性が高く、板塀の高さは土壁と同様で、構造的には伏屋根を呈するものと考えられます。溝には小さな穴が伴いますが、柱穴と断定できるものではなく、後で述べる壁支柱を伴う壁立ち構造の竪穴住居とは明確に異なるものと判断されます。

飛鳥時代の四本主柱をもつ竪穴住居は、竪穴規模が一辺８ｍを越えるものから６ｍ前後の中規模なものまでありますが、規模が大きくなっても柱の本数は変わらず、大型は柱の間隔を広く、中型は狭く設定してあります。オンドル状遺構も大型竪穴と中型竪穴とで大きな構造の違いや規模の違いはなく、基本的には同じ

南半が削平されたオンドル状遺構付中型竪穴住居跡（SI88）

SI88のオンドル状遺構と出土土器

構造をもちます。ただ、大型竪穴の場合、SI102のような床面の中央付近に焼けた箇所が見られるケースが多く、煮炊き専用のカマドと併設して囲炉裏状の施設を作った可能性があります。居間の空間が広いため、明かりや暖をとるのにカマドだけでは不十分だったのでしょう。

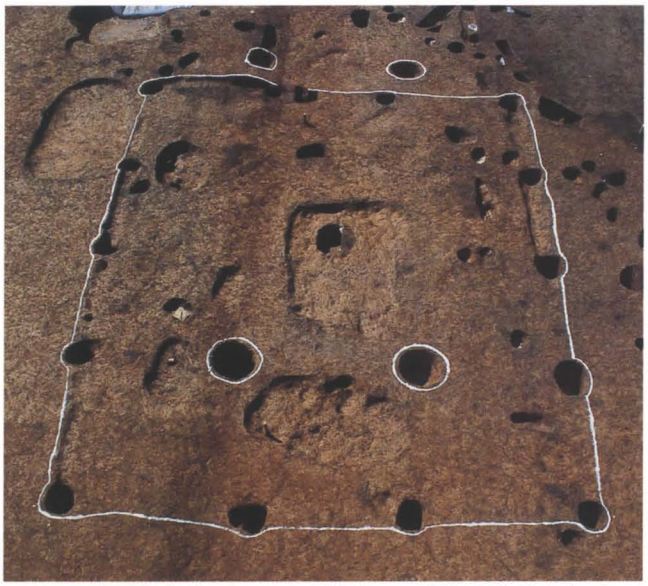
オンドル状遺構付大型竪穴住居跡（飛鳥時代中頃、SI102）
（竪穴住居中央に床面の強く焼けた箇所がある）

オンドル状遺構付大型竪穴住居跡（飛鳥時代中頃、SI81）
（竪穴中央に焼床箇所あり、竪穴の南隅付近削平される）

SI102のオンドル状遺構

壁立ち構造の竪穴住居跡

B地区の調査でも発見されましたが、飛鳥時代後葉になると竪穴の壁沿いに深い溝が巡り、その中に細い柱が等間隔で並ぶ竪穴住居が出現してきます。主柱で支える伏屋根の竪穴が隅丸正方形なのに対し、この竪穴住居跡は正長方形の竪穴を呈することが特徴で、竪穴壁沿いの溝に板塀を埋め込んで固定し、柱で家の壁と屋根を支える、掘立柱建物の構造に似た竪穴住居であったと理解しています。ただ、掘立柱建物と異なるのは、壁沿いの柱が細い点と壁沿いの柱に加え、四本の主柱が長軸に沿って建てられる点です。この柱はSI98のような片側の柱穴が竪穴の壁近くまで片寄るのが特徴で、SI91のような片側が竪穴の外に出てしまうものも確認されます。柱は壁柱よりも太くしっかり立てられているため、棟持ちの主柱と考えていますが、具体的な上屋の構造については謎の部分が多い建物です。この竪穴構造は、奈良時代も存在し、主柱タイプの竪穴住居が消滅する奈良時代前半まで併存します。奈良時代のものは、竪穴が浅くなって小型化し、主柱が確認できなくなります。このような傾向は同時期の伏屋根構造の竪穴住居に共通するような特徴と言えます。



飛鳥時代後葉頃の壁立ち構造の竪穴住居跡（SI91）
（床面まで削平されているが、主柱穴が竪穴外に出るタイプ）

奈良時代初め頃の壁立ち構造の竪穴住居跡（SI86）
（正方形竪穴で、カマドはコーナーに向いて付けられる）

オンドル状遺構の終焉

通常、壁立ち構造の竪穴住居跡にはSI86のような戸外直結型のカマドが竪穴住居のコーナーに煙突が向くように造り付けされるのですが、SI98のカマドは造り付けされる箇所は同じでも「L」字に曲がって壁沿いに煙突が伸びるオンドル状遺構の形態を持ちます。住居内を巡る煙突は短く、既に暖房効果は望めない形態と言え、形だけが「L」字型をなすだけで機能的には戸外直結型と違いがないようです。SI98は出土土器から飛鳥時代の後葉頃と想定されており、オンドル状遺構をもつ竪穴住居跡の中では最も新しく位置付けられます。最後のオンドル状遺構はこのように暖房機能をもたず、形だけを踏襲していたものと言えます。

SI86のコーナーを向く戸外直結型カマド

オンドル状遺構を伴う壁立ち構造の竪穴住居跡(飛鳥時代後葉、SI98)

SI98のオンドル状遺構(南隅に付けられる煙道短縮型)

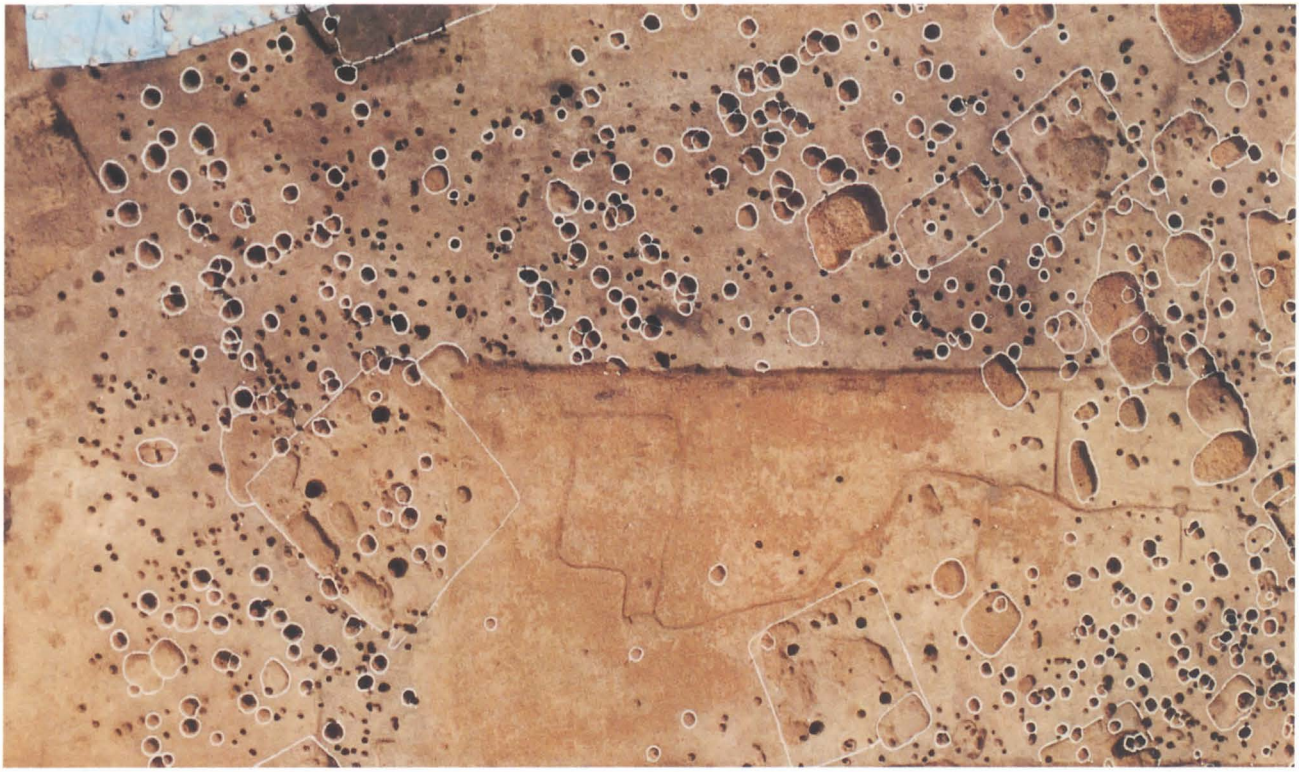
壁立ち構造の竪穴住居は、額見町遺跡だけでなく、野々市町にある末松遺跡や滋賀県などでも多く確認されている住居構造で、他の遺跡でも額見町遺跡同様、飛鳥時代後葉頃に出現してくるようです。滋賀県の野田道遺跡では藤原京の時代にオンドル状遺構を伴った壁立ち構造の竪穴住居が確認できており、他の遺跡でも何例かこのような事例が見られます。遺跡によっては、オンドル状遺構がその地域で踏襲されたカマド構造である可能性はないとは言えませんが、オンドル状遺構を渡来人の痕跡と考えれば、この新型住居構造も朝鮮半島からの渡来人によってもたらされた建築技術である可能性が高いと言えましょう。額見町遺跡ではB地区のSI76が伏屋根構造との折衷形態ではありますが、最も古く位置付けられるもので、これに通常のオンドル状遺構が伴うなど、壁立構造の竪穴住居導入とともに、オンドル状遺構をもつ大型竪穴住居は伏屋根構造から壁立ち構造へと転換した可能性があると言えます。壁立ち構造の竪穴住居は、若干形態変化しながら、日本海伝いに越中、越後、出羽など北へと広まっており、文化や技術が伝わる様子が見て取れます。

SI98のオンドル状遺構(左は煙道が戸外へと傾斜する様子、右は煙道及び壁周溝の掘り方断面)

3. 建ち並ぶ掘立柱建物

a. 様々な堀立柱建物跡

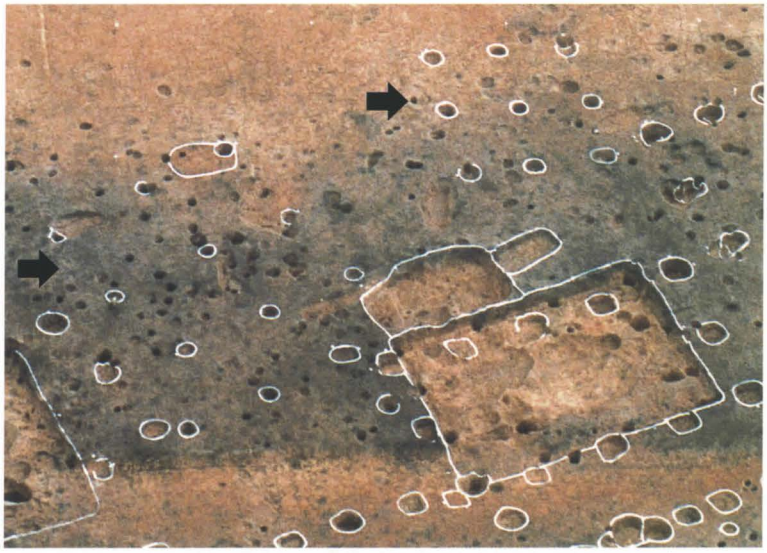
掘立柱建物跡は、平地に建てられるため、遺跡で発見される時は柱穴のみとなっていることがほとんどです。そのため、柱穴の大きさや形、配置の仕方で、建物の種類や構造を見極めています。構造等については、これまで発行してきた概要報告書１・２に詳しく述べているため、それを参照してほしいのですが、掘立柱建物跡は外周を柱が並ぶ側柱建物と碁盤目状に柱が並ぶ総柱建物とに大別され、主に前者は居住用建物として、後者は米蔵などの倉庫用高床式建物として異なる機能を持っていたと考えられています。また、柱穴の大きさや深さによっても、構造が異なっていた可能性が高く、公の施設や米蔵などの建物は太い柱で柱の間隔が一定に重厚に建てられますが、位の低い人の家や小屋に類する建物は小さな柱が不規則に並ぶ簡素な建物であったと予想されます。



北に主軸を揃え立ち並ぶ居住用側柱掘立柱建物跡と重複して建て替えられている倉庫用総柱掘立柱建物跡

b. 中世へと続く新しい掘立柱建物構造

平安時代後期になると、居住用建物はそれまでの側柱建物に代わって、総柱建物が主体を占めるようになります。平安時代中頃に公の大規模な施設に先駆的に導入されたものが、平安時代の終わり頃に一般の住居まで浸透してきたもので、この頃のものは、総柱建物と言っても、米蔵などの柱穴の大きな重厚な作りのものと異なり、細い柱穴がまばらな間隔で並ぶ建物となっています。米蔵などの総柱建物が高床式建物であると予想されているのに対し、居住用の建物は建物内の柱が床を上げるためのものではなく、大型の家を支えるための柱配置であったり、効率的に屋根を支えるためのものであり、全く別構造の建物の出現と言えます。この建物構造は、これ以降、室町時代まで一般的な掘立柱建物跡の構造となり、北陸各地に広く普及します。



平安時代後期の総柱掘立柱建物跡（C地区SB164とSB190）

4. 古代の墓穴

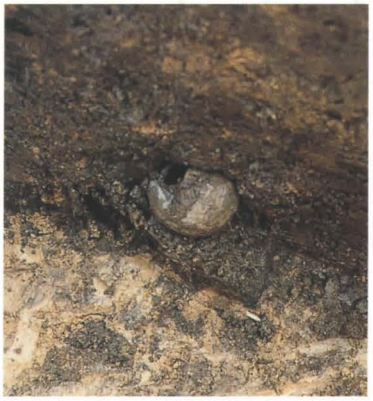
a. 古代の墓

丘陵頂上部に埋葬された奈良時代の火葬墓(河田山古墳群)

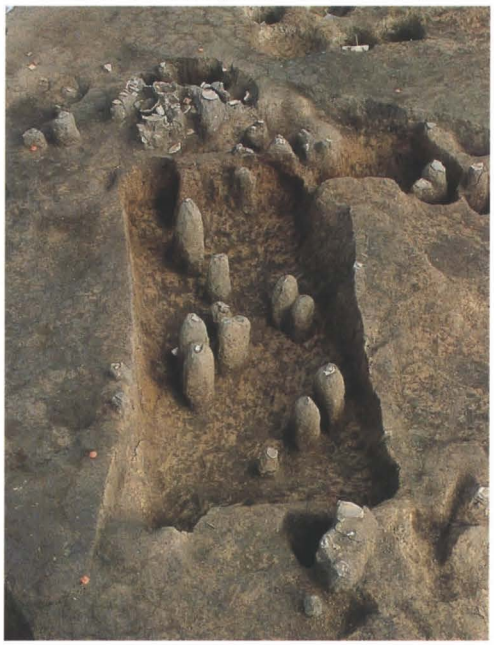
古墳時代に盛んだった古墳の築造は、飛鳥時代後半に入ると規制されて、一部の階級や地域に限定されるようになり、急激に衰退して行きます。このように、古代は大規模な墓を作らない時代のため、墓の発見が難しく、実態はあまりよくわかっていません。ただ、奈良時代に入ると火葬した骨のみを骨壷に入れて穴に埋葬する火葬墓が普及するようになり、小松市でも河田山古墳群の丘陵頂上付近で奈良時代と平安時代初め頃の火葬墓を発見しています。これまでの調査事例では、火葬墓が集落遺跡の中から発見されることは少なく、村のはずれや村に近い丘陵地に単独で発見されるようで、古墳に似たような場所に埋葬されたものと思われます。この時代、須恵器の壷が量産されることから考えても、火葬墓が全国的に普及していたことは間違いないですが、古墳に埋葬されるような位の高い人が主に埋葬されたもので、その他の人々は土葬が主であったと考えられます。土葬でも、穴にそのまま埋める場合と木の棺に入れて埋める場合（土器の棺の場合もある）とが有り、後者は火葬墓と同様の位置付けがなされる場合もあるようです。古代の墓は、古墳時代と違って、様々な墓の形態があり、地域によっては古墳同様の大型墓を平安時代まで作り続けるなど、多様で複雑な様相をもつことが特徴と言えます。

土葬墓の可能性をもつ土坑(SK172)

b. 額見町遺跡で発見された墓穴の特徴


SK172から出土した銅製の鈴

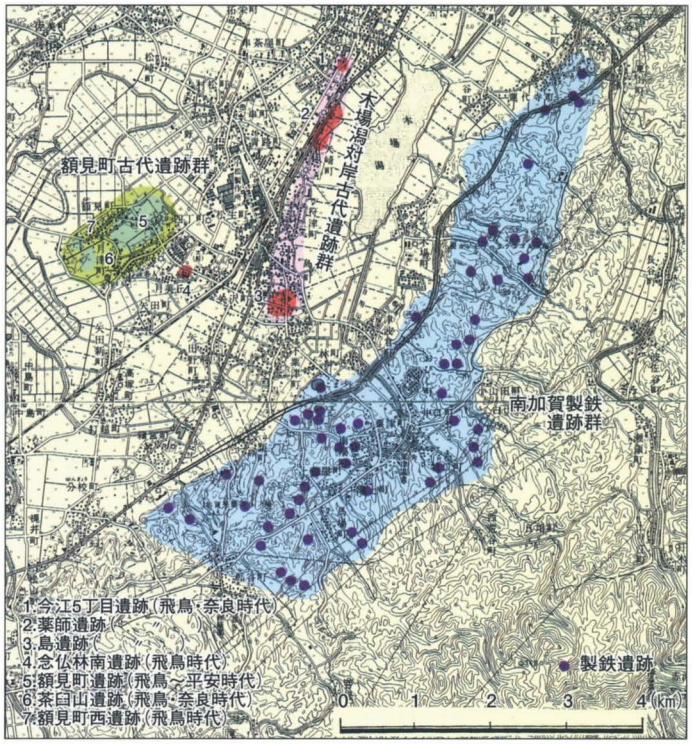
額見町遺跡ではこれまで約180基にのぼる土坑（柱穴以外の大きめの穴）が発見されていますが、その半数近くは不要の廃棄物を捨てた穴で、土器が多量に出土する特徴をもちます。他に粘土採掘をしたような穴や用途不明の不整形の穴などありますが、今回の調査で墓穴（考古学では墓壙と言います）の可能性をもつ土坑が発見されました。人骨は発見されないため、墓と断定することは難しいのですが、土坑の形や規模、遺物の出土状態を他の遺跡で墓壙とされているものと比較した結果、墓穴の機能をもつものと判断しました。土坑の規模は幅１ｍ、長さ２ｍの細長い形態で、壁が直立し、深く掘られており、底面が平坦に作られることを特徴とします。遺物の出土がほとんどないことも特徴で、出土する場合は底面近くに完全な形に近い土器や副葬品と思われる金属製品が置かれるように埋められています。土坑の形が長楕円形であるものがほとんどで、これについては直接土葬した可能性が高いのですが、土坑の四隅に小さな穴が張り出す長方形のSK172は、木棺に入れて埋葬した可能性が高いと考えています。このような墓壙は、村の領域の中でも家の密集する区域を避けて、墓域を設定し、群集して作られることが多いのですが、額見町遺跡では居住域の中で確認されています。ただ、墓壙内の土器が少ないため、時期の特定が難しく、同時期の建物が周辺に存在しない可能性もあります。墓壙は建物などと同じ方位に並ぶようにして掘られており、Ｃ地区の南側にまとまる傾向をもちます。


木棺に埋葬した可能性をもつ土坑(SK182)

5. 製鉄鍛冶と鍛冶道具

a. 額見町遺跡の製鉄鍛冶と丘陵部の砂鉄製錬

日本に鍛冶の技術が伝わるのは弥生時代のことですが、原料砂鉄から鉄を生成するようになるのは、古墳時代後半のことで、地方にその技術が普及してくるのは飛鳥時代となります。地方で鉄作りが行われるようになって、鉄製品は普及してきますが、砂鉄から鉄への生成工程（砂鉄製錬）は高い技術と多くの労力、資源を必要とするものでした。そのため、鉄は古代においても貴重品であり、政治的な駆け引き材料に使われたり、官営の手工業生産の重要な部分を占めていたと考えられます。ただ、修理や再生が可能な素材であるため、リサイクルは徹底して行われたようで、中規模クラスの集落遺跡でも修理程度の鍛冶は少なからず行われていたと思われます。しかし、大規模に鉄製品を製造するとなると、高い技術が必要とされたわけで、額見町遺跡のような鉄製品の定量生産は、地域を掌握するような中核的な村で技術者を配置し、専業的に行われたものと予想されます。額見町遺跡の製鉄鍛冶は、蓮代寺町から那谷町に広がる丘陵部の南加賀製鉄遺跡群で行われる砂鉄製錬と連携する関係をもち、これまでは額見町遺跡の専売特許と考えていましたが、最近の調査で、木場潟の対岸にある矢崎町や島町などの台地上に営まれた古代集落遺跡で製鉄鍛冶に伴う滓が多量に出土していることを確認しました。点的な調査であるため詳細はつかめていませんが、額見町遺跡を越える規模の製鉄鍛冶が木場潟対岸の台地で行われていた可能性もあり、製鉄鍛冶を生業とする古代集落が製鉄遺跡群の周辺に点在する可能性が出てきました。ただ、額見町遺跡の所在する地が額田郷であるのに対し、木場潟対岸の集落遺跡群は矢田郷に属しており、製鉄遺跡群も林町を境に北と南へ分かれていた可能性が高いことから、別組織であった可能性もあります。木場潟対岸の古代集落遺跡も飛鳥時代に出現し、奈良時代を通して営まれるものであり、額見町遺跡と類似した動向をもつ点で注目される古代遺跡群です。



南加賀製鉄遺跡群の分布と古代集落遺跡群の分布（1/100,000）

b. 石で囲んだ鍛冶炉

額見町遺跡ではＢ地区で粘土を底に貼った鍛冶炉が５基確認されていますが、炉を囲む部分は検出されておらず、石で囲んだ炉と粘土で囲んだ炉の両方があったと考えています。Ｃ地区では鍛冶滓や粒状の鉄滓が分布する箇所で石の遺存する例（SJ20）があり、石囲みの鍛冶炉である可能性をもちますが、ここでは炉床は確認されず、断定はできません。ただ、周辺の土坑や竪穴住居などから鍛冶炉の壁に使ったと思われる表面に鉄滓が付着した石が出土しており、これまでの出土割合から考えて、額見町遺跡では石囲み炉が主流であったと予想しています。各地で通常確認されている鍛冶炉は、粘土で炉の本体を作るものであり、石囲み炉は全国的に類例が乏しいのですが、羽咋市の寺家遺跡で発見例があり、北陸特有の鍛冶炉形態である可能性があります。

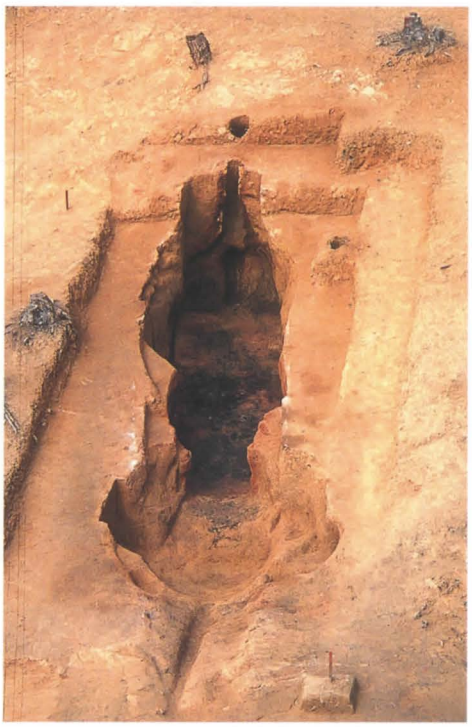
石囲み炉形態の可能性をもつ製鉄鍛冶炉（SJ20）

鍛冶炉壁に使ったと思われる鉄滓付着の石

c. 木炭を作った穴

砂鉄から鉄を生成する砂鉄製錬や鉄から鉄製品を成形する精錬鍛冶において、燃料となる木炭は必要不可欠であります。海や川で採取する砂鉄を原料としているのにもかかわらず、砂鉄製錬が丘陵部で行われるのは木炭の生産に都合がよかったからであり、製鉄炉と木炭窯はセットで営まれます。製鉄には砂鉄の数倍の量の木炭が必要であったようで、一つの大きな製錬炉を維持するのに、一山の樹木が伐採されたとも言われているほどです。丘陵部で築かれる木炭窯は全長５ｍを越える大型の窯で、須恵器窯と類似した構造をもつ窖窯です。額見町遺跡の製鉄鍛冶に使われる木炭も丘陵部で作られたものを運び込んでいる可能性は高いのですが、小規模な木炭生産であれば、集落でも可能であります。Ｃ地区で発見された木炭を焼成したと思われる土坑（製炭土坑）は、幅100cm、長さ120cmの長方形土坑で、斜面に直交して掘られています。底の平らな土坑で、壁と底が焼け、部分的に炭素を吸って黒色化したり、灰色になっていました。熱を受けた層が厚く、強く焼けている点から、何度も木炭の焼成が行われたことを伺わせる資料です。

木炭を焼成した土坑（SK111）



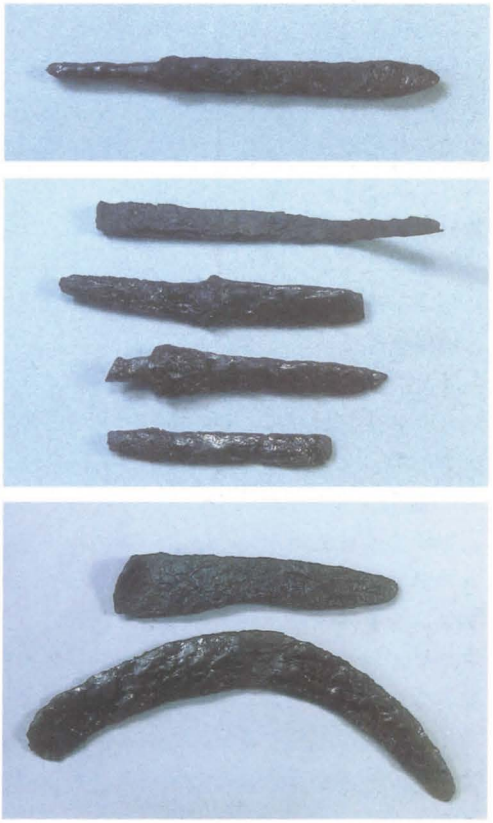
丘陵部に作られた木炭窯（木場遺跡A区）

鍛冶道具（鏨）の可能性をもつ鉄製品

d. 額見町遺跡から出土した鍛冶道具と鉄製品

額見町遺跡からは多くの鉄製品が出土していますが、そのうちの一部は鍛冶道具として使われた可能性をもつものです。鍛冶道具には、鉄を叩くための鉄鎚（かなづち）と台石となる鉄床石（かなとこいし）、鉄を挟むための鉄鉗（かなさし）、製品に刃をつける砥石、鉄の切断を行う鏨（たがね）などがあり、砥石以外はこれまでの調査で確認できていませんでしたが、Ｃ地区の調査で鉄鎚や鏨と形状が類似する鉄製品を数点確認しました。鍛冶道具の断定には詳細な検討を必要としますが、現段階ではその可能性が高いと考えています。鍛冶道具の出土は、これまで古墳への副葬品が主で、古代の集落遺跡などからはほとんど出土していなかったのですが、最近、鍛冶関連遺跡の調査事例が増加し、古代の鍛冶道具の実態が少しずつ分かってきたようです。

額見町遺跡では、鍛冶道具の他に製品となる鉄器が出土しています。ほとんどが小型製品で、鎌などの農具や細長いナイフのようなカンナ（鉋）（やりがんな）、小刀のような刀子などの工具、矢の先に付ける鉄鏃などの武器、糸を紡ぐ弾み車となる紡錘車などの生産工具が出土しています。ここで使われて廃棄されたものがほとんどでしょうが、ここで生産された可能性は高いと考えています。



額見町遺跡出土の鉄器（右上から下へ鉄鏃、鉋、刀子、鎌、左下は紡錘車）

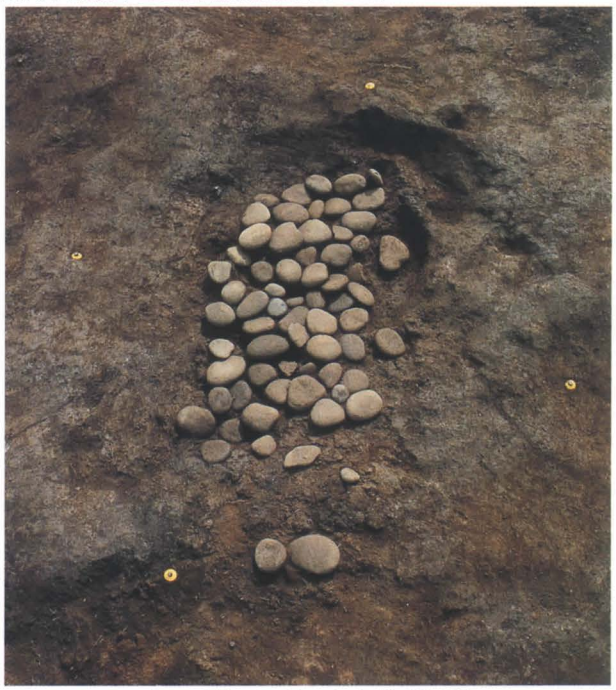
6. その他の主な遺構と遺物

a. 土師器を焼いた穴

平安時代中期後半の土師器焼成坑(SK146)

今回の調査ではC地区で１基の土師器焼成坑を発見しています。土師器とは縄文時代から続く伝統的な野焼き技法によって焼き上げる赤褐色ないしは肌色のやきもので、それを焼いた穴の痕跡が土師器焼成坑と言われるものです。縄文時代から続く野焼きですが、古代では草や稲藁などで覆って焼く方法に改良されおり、少ない燃料で効率よく土器焼きすることが可能となりました。その具体的な方法については、概要報告書２で説明していますので、参照ください。C地区で確認された場所はB地区で５基が確認された同じ斜面の続きで、平安時代中期後半に位置付けられるものです。ここで焼かれた土師器は椀形の食器が多く、多くの焼け損じ品が捨てられていました。

b. 中世の墓



室町時代の石積みした墓(SX01)

墓壙と言われる古代の墓穴の他に、室町時代頃の墓跡がC地区の北西端で１基発見されています。柴山潟へと傾斜して行く台地縁辺で、周辺には古代の遺構がほとんど確認されなくなる区域です。墓跡は上部が削平されており、全体の形状はわかりませんが、盛り上がるように石が積まれた痕跡があり、拳大の丸い石を底に敷いていることが確認できました。人骨の発見などはなく、骨壷なども未確認であり、墓と断定することはできませんが、この時期に多く確認される石を使った墓の形態に似ています。額見町遺跡ではこの時代の建物などは未確認ですが、台地の下の低地帯では「額田荘」に関連する集落が広がっており、墓地を額見町遺跡の存在する小高い台地斜面に作ったものと予想しています。

また、平安時代終わり頃に位置付けられるものですが、C地区では土師器皿を何枚か重ねて埋めてある土坑が数カ所確認されています。この土坑は幅が70～80cm、長さが100cm程度の小型楕円形のもので、上には白い粘土が埋められていました。土師器皿は完全な形のもので、これとともに緑色の石で作られた管玉（首飾り）が１点埋められています。これらは何かの儀式やお祭りの際に使った容器を穴に埋めたものとも考えられますが、中世に入るとこのような墓を作る風習があるようで、これらの土器や首飾りは葬式の時のお供え品と考えることも可能と言えます。

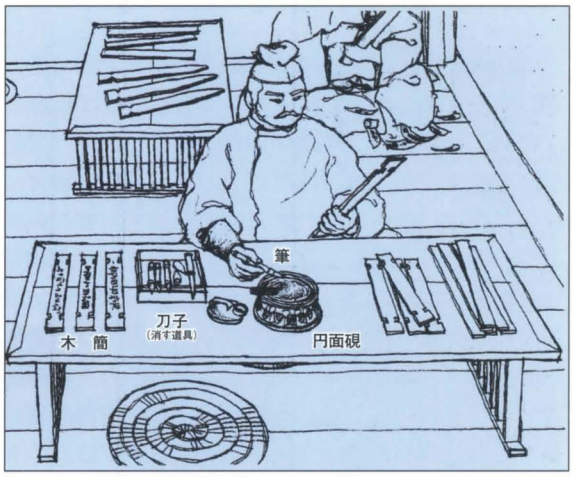
平安時代終末の土師器皿と管玉を出土する土坑(SK110)

c. 硯と墨書土器

古代の律令政治は文書伝達を基本とする文書主義がとられていた時代で、役人たちにとって、筆記用具は欠かすことのできないものでした。古墳時代終わりには中国や朝鮮半島から墨・硯・紙が伝わり、飛鳥時代後半には地方の役所でも使われるようになります。遺跡から墨や紙が出土することは極稀であり、木札に記した書簡（木簡）や土器に墨書したもの、硯の出土からその存在を知ることができます。古代の硯は陶製で、飛鳥・奈良時代は研面が円形の円面硯が主流でした。額見町遺跡では飛鳥時代後半のものを初めとして、これまでに10数点出土しており、村の中で働く下級役人の様子が偲ばれます。また、これまでは出土していませんでしたが、C地区から土器に文字を墨書したものが１点出土しました。皿の底に「主」と１字だけ書かれており、これは奈良時代後半のものです。

飛鳥時代後半の円面硯（SI72）

筆立て付の円面硯（SI90）



木簡の墨書風景（山中・佐藤1985より転載）

「主」の墨書をもつ須恵器盤

d. 特殊な陶製品

古代には何かの形を模して作られた形代（かたしろ）が多く作られます。代表的なものでは人形があり、馬や魚、鳥、船などの形代も作られました。木製品と土製品とがあり、いずれも儀礼や祭、お祓いなどに使われた道具です。額見町遺跡からは鳥の形を模した須恵器（鳥形須恵器）と馬を形どった陶製品（陶馬・土馬）が出土しており、陶製の馬は額見町遺跡の南側にある茶臼山遺跡でも出土しています。また、形代と同様に儀礼・祭祀に使われた陶製模造品が出土しています。銅製の竿秤の重りや石製紡錘車などを模した陶製品で、陶製分銅・陶製紡錘車と呼ばれているものです。これらの特殊品は、宮都で行われる儀式や祭を真似たものであり、陶製模造品などはその代用品であったのでしょう。今回の調査では、陶製分銅が完全な形で２個、土坑から出土しました。８世紀前半代に位置付けられるもので、２個とも上端の同じ箇所が欠けており、陶製分銅の使用方法を考えるうえで重要な資料となります。

SK132より出土した陶製分銅

e. 銅製の装身具

額見町遺跡からは、これまでの調査で、銅製品が３点出土しています。金銅製と思われる耳環２点と銅製の鈴１点で、耳環の表面は金メッキが剥げていますが、当時は金色に光るイヤリングだったのでしょう。A地区とB地区からほぼ完全な形で出土しており、両方とも飛鳥時代に位置付けられます。銅製の鈴は墓壙から出土したもので、副葬品と考えられるものです。

銅製鈴（SK172出土）

金銅製の耳環（右の耳環は金メッキが残っている）

Ⅳ．額見町遺跡を多くの人に知ってもらうために

オンドル状遺構の記者発表風景(平成8年)

額見町遺跡の発掘調査が平成７年度に始まって、今年で５年目を迎えました。今年度調査で発掘調査区域のうち８割以上が完了し、平成12年度の調査をもって全ての発掘調査を完了する予定です。既に発掘調査が完了しているＡ・Ｂ・Ｃ地区は、昨年の春に行われた造成工事によって、既に消滅しており、今年度完了した区域やＤ・Ｅ地区も平成12年の秋には工事によって消滅してしまう計画がたっています。このように、遺跡の発掘調査は保存を前提とした調査でない限りは、発掘調査が完了すれば消滅してしまう運命にあり、遺跡の発掘調査は破壊と背中合わせにあるわけです。発掘調査は、それだからこそ、精度の高い調査や詳細な記録が必要とされるわけでして、ずさんな調査によって、間違った歴史を作ってしまうことのないよう十分に注意する必要がある訳です。遺跡は破壊が免れれば、そのままの状態で残されるのが最もよく、額見町遺跡の発掘調査区域の中でも、その一部が公園緑地として残すこととなりました。発掘調査による遺跡の記録収集はできませんが、後世の人々に遺跡をそのままの状態で残せることは重要なことだと考えます。

平成11年に行った地元額見町町内会を対象とした額見町遺跡の現地説明会

遺跡は国民共有の財産であり、だれでもそれを活用する権利をもっています。額見町遺跡では多くの方に発掘調査の成果を活用していただくためにいろいろな活動を行っています。これまで刊行してきた額見町遺跡の発掘調査概要報告書もその目的で作成してきたものであり、発掘調査成果を一般の方々に活用していただくため、できるだけわかりやすい文章にしてあります。新聞やテレビ等への発表もより多くの方々への情報公開を目的としたものであり、『小松市埋蔵文化財調査だより』の刊行も同様の趣旨をもつものです。これらは発掘調査の成果を公開・普及する目的で行っているものですが、遺跡が存在するうちは、実物の遺跡や遺物を肌で実感していただくのが最もよいと考えています。遺跡の現地説明会では、実際に出土している土器や住居跡に触れることも可能でありますし、遺跡の臨場感を体験できる絶好の機会であります。額見町遺跡では現地説明会をこれまでに何回か行ってきましたが、調査最終年度であります平成12年に最後の現地説明会を行いたいと考えています。また、学校の歴史授業の中で地元の遺跡を知り、体験してもらうため、学校の要望にもとづいて、体験発掘や土器焼き体験などを行っています。これまでは地元近隣の小学校のみですが、生きた教材を使うことのできる数少ない機会と、好評を得ています。

一般の方々にとって、遺跡やその発掘調査現場は、まだまだ馴染みが薄く、文化遺産という意識は薄いのが現状です。しかし、今調査を行っている遺跡の９割以上は数年後に間違いなく消滅してゆくものなのです。遺跡が少しでも多くの方々の目に触れ、歴史体験していただきたく、消え行く文化遺産を肌で実感してもらえるよう努力して行くつもりであります。

平成9年に行った月津小学校児童による土器焼き体験(遺跡にある粘土を使って野焼きしました)

V. さいごに

これまでの発掘調査成果から、額見町遺跡の性格を幾度か論じてきましたが、整理すると、①渡来人移住村落、②製鉄・製陶遺跡群の母体村落（村落内での手工業生産も行われる）、③額田里（郷）関連村落の３つにまとめることができます。以上は、調査初年度より予測していたことで、概要報告書１で既に述べています。その後の調査でも内容を大きく変更させる発見はありませんが、今回の調査で加わった新たな知見を述べておきたいと思います。

まず、オンドル状遺構をもつ竪穴住居についてですが、Ａ地区調査時は、オンドル状遺構付の竪穴住居が飛鳥時代前半に集中し、後半の事例は小型竪穴に付くもののみとなることから、集落成立時の初代構成員のみ採用し、次代からはオンドルから通常のカマドへ転換して行ったと予測しました。しかし、Ｂ地区の調査で飛鳥時代後半の古い時期まではオンドル状遺構が残存することを確認し、さらにＣ地区の調査でそれより新しい時期まで下ることを確認しました。飛鳥時代中頃以降、竪穴住居は通常のカマドをもち、柱穴が竪穴外に立つ小型竪穴が出現し、主流となるため、オンドル状遺構付竪穴住居の率は低下しますが、大型竪穴住居には最後までオンドル状遺構が伴い、それが通常のカマドに転換するのは飛鳥時代終わり頃になると予想されます。この時期の大型の竪穴は既に壁立構造をもつ新型竪穴住居に転換しており、渡来系建物様式の第二波が時期を同じくしてやってくると言えます。飛鳥時代の大型竪穴住居の全てがそうであるとは言い切れませんが、かなりの割合であったと予測できます。

第２点としては、古代に位置付けられる墓壙が発見されたことです。発見された数は多くないですが、比較的まとまりをもって作られており、ある時期に墓域として設定されていた可能性をもちます。集落内の一角に墓域を設定し、群を形成する良好な事例に福岡県小郡市の干潟城山遺跡があります。この遺跡はオンドル状遺構をもつ竪穴住居が32軒発見された全国最多発見数をもつ遺跡で、製鉄鍛冶を集落内で盛んに行っています。竪穴住居の時期は飛鳥時代後半から奈良時代前半と額見町遺跡よりも新しいですが、類似する性格をもった遺跡として注目されます。この遺跡に隣接して御原郡衙が作られており、古くから渡来人の交流のある地域です。このような墓壙の風習が渡来人との関連で考えられるかは資料不足ですが、その可能性を考えておく必要性があるかも知れません。

以上、額見町遺跡のＣ・Ｄ地区調査成果を紹介してきましたが、今回の報告はいかがだったでしょうか。言葉は分かり易くしたつもりですが、内容は少し難しかったかも知れません。毎回、概要報告には特集を組み、１では遺跡の歴史背景と調査までの段取りと過程を、２では出土品の整理研究方法を紹介しました。今回は額見町遺跡を多くの方に活用していただくために私達が取り組んでいることを紹介させていただきました。多くの方にこの本が読まれ、活用していただくことを調査スタッフ一同願っております。

平成11年に行った日末小学校児童による体験発掘の様子

1．　本書は、小松市が施工する小松市串・額見土地区画整理事業に先立って、小松市教育委員会が実施した造成用地内埋蔵文化財（額見町遺跡）発掘調査の概要報告書－３－です。

　報告の内容は、調査内容の普及・啓蒙に主眼をおいたもので、簡易な文章で一般の方々に解り易くしてあります。

2．　発掘調査の費用及び本書の印刷経費は、小松市土地開発公社が全額負担しました。

3．　発掘調査の調査地、調査面積、調査期間、担当者は次のとおりです。

《調 査 地》　石川県小松市額見町なの部

《調査面積》　10,000㎡（Ｃ・Ｄ地区）

《調査期間》　平成10年４月６日～平成10年12月20日

《担 当 者》　小松市教育委員会埋蔵文化財調査室　主査　望月精司　　調査員　大橋由美子

4．　本書の執筆及び編集は、望月が担当しました。

5．　本書を作成するにあたり、以下の文献を引用及び参考とさせていただきました。

小郡市教育委員会　1994・1995　『干潟城山遺跡Ⅰ・Ⅱ』

北野博司　1997　「古代北陸の地域開発と出羽」『蝦夷・律令国家・日本海』日本考古学協会・1997年度秋田大会実行委員会

東日本埋蔵文化財研究会　1995　『東日本における奈良・平安時代の墓制－墓制をめぐる諸問題－』第５回東日本埋蔵文化財研究会資料

森浩一・編　1975　『日本古代文化の探求・墓地』　社会思想社

山中敏史・佐藤興治　1985　『古代の役所』（古代日本を発掘する－５－）　岩波書店

6．　本書を作成するにあたり、富山市教育委員会にご協力いただきました。ありがとうございました。